

看護学生がとらえた「サテライト・デイ」の意義と実習時期による学習到達度の相違

－ KJ 法を用いたグループワークの成果をルーブリック評価指標と照合して－

木下 香織*・栗本 一美・丸山 純子・古城 幸子

新見公立大学看護学部

(2015年11月18日受理)

A大学看護学部の生活支援看護学実習では、学生がルーブリック評価指標をより効果的に活用できることをねらいとして、学内カンファレンスにKJ法を用いたグループワークを取り入れた。本稿では、グループワークで作成したKJ法の図解を基に、学生のとらえたサテライト・デイの意義を明らかにすること、実習時期による学習到達度の相違を明らかにすることを目的として、ルーブリック評価指標との照合をおこなった。その結果、サテライト・デイについては、実習時期の異なる学生が共通して、高齢者同士や高齢者と学生の交流、高齢者の健康増進や生きがいづくりに寄与する活動としての意義を感じていた。ルーブリック評価指標との照合においては、現在の内容では一致しにくいものもあった。また、実習時期による相違として、実習時期が進むにつれて学生の学びがより広い視野で得られていることがうかがえた。ルーブリック評価指標の検討と実習時期の違いによる学生のレディネスを考慮した体験の意味づけの支援が今後の課題である。

(キーワード) 看護学実習, 学習到達度, 実習時期, ルーブリック, KJ法

はじめに

A大学看護学部で実施している生活支援看護学実習は、4年課程へとカリキュラム移行する際に科目立てをした。短期大学時代に地域・老年看護学の臨地実習の一部として取り入れたサテライト・デイの教育評価¹⁻²⁾を基盤に独立した実習とし、A大学の特色あるカリキュラムとなっている。実習目標は、短期大学時代のサテライト・デイの計画・実践・評価のプロセスを基礎に5項目を掲げ、ルーブリック評価指標を作成し³⁾、指導に活用してきた。4年制カリキュラムがスタート後の教育評価として、学生の自己評価を基にした生活支援看護学実習の学習到達度の分析では、サテライト・デイの実施回数を重ねることで学生の学びが深まっていることが確認できた。しかし、学生のルーブリック評価指標の活用については課題があり、学生の指導方法について工夫する必要があった⁴⁾。

A大学看護学部では、老年看護学実習においてもルーブリック評価指標を活用した実習を展開しており、その活用効果について学生から高い評価を得た⁵⁾。老年看護学実習では、学生2～3名と教員でルーブリック評価指標を用いた実習経験の振り返りをおこなう学内演習の意義が大きい。一方、生活支援看護学実習では、学生がルーブリック評価指標を用いて学習到達度を自己評価する機会が少ないことが課題と考え、2014年度後期から実習記

録の様式と学内カンファレンスの方法を変更した。本稿では、学内カンファレンスに取り入れた、KJ法によるグループワークの成果を基に、学生のとらえたサテライト・デイの意義を明らかにすること、ルーブリック評価指標と照合し、実習時期による学習到達度の相違を明らかにすることを目的とした。

1 研究方法

1. 対象

2014年後期から2015年度前期に生活支援看護学実習を履修したA大学看護学部学生60名

2. 方法

- 1) 分析対象: 生活支援看護学実習1週めの学内カンファレンスでおこなった、KJ法を用いたグループワークで作成した図解。1年間に4回、16名程度の学生が2グループに分かれてKJ法をおこない、8枚の図解が作成された。各時期の2枚の図解のうち、より特徴的な図解を選択して分析対象とした。
- 2) 分析方法: 図解について、実習時期ごとに小グループの表札とルーブリック評価指標(表1)との照合、実習時期の異なるグループで図解の比較をおこなった。
- 3) 倫理的配慮: 研究対象の学生に該当の実習記録を返却する際に、本研究の目的、研究への協力は自由意思

*連絡先: 木下香織 新見公立大学看護学部 718-8585 新見市西方1263-2

表1 生活支援看護学実習 実習総括 ルーブリック評価指標（目標5.「学習者として」を除く）

実習目標の自己評価				
スケール	1. 地域で暮らす人々を多面的・総合的に理解する	2. 健康ニーズを捉えたサテライト・デイを企画する	3. 安全で効果的なサテライト・デイを運営する	4. サテライト・デイの学びと課題が評価できる
レベル1	・対象者の健康観、健康ニーズ、健康行動や生活スタイルの個性が理解できた ・生活圏域の環境や季節に応じた暮らしの実際が理解できた	・安全で楽しい交流の場となるよう企画できた	・健康チェックや健康教育、レクリエーションが一貫した目的をもって実施できた	・参加者との交流によって得られた学びを共有することができた
レベル2	・生活圏域の歴史、伝統、文化を理解し、対象者の QOL に与える地域の影響が理解できた	・健康レベルや生活スタイルに応じた企画ができた	・参加者の身体的状況をアセスメントし、活動中での配慮に気づき支援できた ・参加者の知恵発信の場作りを学び、参加者個々が活かされる支援ができた	・介護予防活動としてのサテライト・デイの意義が理解できた ・参加者の健康問題と今後の課題について考察できた
レベル3	・高齢者の QOL の向上のための支援について理解できた	・参加者の生きがいや役割を理解し、主体性や自主性の発揮を支援する場が企画できた ・毎日の生活の中で継続できる健康行動へとつながる企画ができた	・参加者との交流を通してコミュニケーション能力を育て、社会的な行動ができた（目上の人に対する言葉遣い、聴く姿勢、周囲への配慮など）	・関係機関との連携や協力など、地域ネットワークの重要性が理解できた ・地域に暮らす人々が健康問題により医療の対象者になるという連続性が認識できた

によること、個人が特定されないようデータ化して分析すること、記述内容および研究協力の可否は成績評価に一切関係しないこと、調査結果を纏めて看護系学会で発表する予定であることを口頭で説明し、研究への協力の可否を紙面にて確認した。また、本研究は新見公立大学研究倫理委員会の承認を得た（2015年3月）。

II A 大学看護学部 生活支援看護学実習の概要と教育方法の変更点

1. 生活支援看護学実習の概要

生活支援看護学実習は、在宅高齢者を対象とした介護予防活動「サテライト・デイ」を学生が企画、高齢者の生活圏域に出向いて実施し、評価する。実習期間は2週間で、その間に学生は異なる地域の在宅高齢者を対象者に3回のサテライト・デイを経験する。

看護学科の臨地実習のうち、成人看護学、老年看護学、小児看護学、母性看護学、精神看護学、在宅看護論の各看護学領域の実習は、3年次後期から4年次前期に担当されている。学生は8グループに分かれて、年間スケジュールに沿って実習を経験する。生活支援看護学実習は、それぞれ2週間の老年看護学実習と在宅看護実習を終了した2つのグループの学生の合同で実習するため、1学年で4クルールの実習をおこなっている。

2. 実習記録および学内カンファレンスの変更内容

2014年度後期に変更した内容は、実習総括用紙の様式と学内カンファレンスの方法である。実習総括用紙は、ルーブリック評価指標に基づいて、毎週、計2回、自己

評価を記述する様式であったが、2週間の実習終了時にルーブリック評価指標に基づく最終的な評価を記入する様式に変更した。

本稿に関連のある学内カンファレンスは、従来は2週ともルーブリック評価指標に基づいて事前に記録した自己評価を発表していたが、1週めの内容を、KJ法を用いたグループワークに変更した。変更の目的は、学生の学びの共有とそれに基づいた学習到達度と課題の明確化である。

グループワークの実施にむけては、1週めの木曜日のサテライト・デイ終了後、「高齢者や地域、学生にとってのサテライト・デイとは」を刺激語に思いつく事柄を、1枚の付箋に1枚の意味内容となるように学生個々に記入して、翌日の学内カンファレンスに持参するよう説明した。グループワークは、実習メンバー16名が2グループに分かれておこなった。中グループが形成できた段階で空間配置と各グループの関連の検討、表札の記載内容とルーブリック評価指標との関連を確認したのち、図解の説明を求めた。

III 結果

4クルールの各時期の図解とルーブリック評価指標との照合について説明する。図解について、学生が付箋に記述した事柄（以下、コードとする）は“ ”，グルーピングで得られた小グループの表札を< >，中グループの表札を【 】で示す。ルーブリックとの照合については、学生がグループワークした照合結果をそのまま記載する。

1. 第1クール

3年次10月下旬、約1年間にわたる臨地実習のスタートの時期に生活支援看護学実習を経験したグループで、テーマは「転倒予防」であった。このクールでは、1週めのサテライト・デイで対象地域内の小学生を交えた交流もおこなった。図解を図1に示した。

【コミュニケーション】は“学生が高齢者とのコミュニケーションを学ぶ場”など<学生のコミュニケーション>，“高齢者同士が会って話せる憩いの場”“違う世代の人と交流することによって良い刺激となったり、元気がもらえたり、癒されたりする場”など<高齢者同士のコミュニケーション>，“地域の人たちと楽しく話したり、元気かどうか安否の確認をすることができたり、情報交換ができる地域の交流の場”など<地域のコミュニケーション>であった。【学習の場】は，“地域で生活している高齢者の健康状態について知ることができる”など<学生の学習の場>，“健康についての知識を身につける場”“高齢者が自分の生活を見直す場”など<高齢者の学習の場>であった。そのほか，“地域や文化、慣習を伝える機会”など<文化>，“自分が頑張っていることの発表の場”な

どく高齢者の生きがい>，“在宅高齢者にとって社会的閉じこもりの予防”など<予防>であった。【コミュニケーション】と【学習の場】との関連性の強さを示していた。

ループリックとの照合では、半数が「サテライト・デイの学びと課題が評価できる」のスケール4に集中していた（表2）。

表2 第1クールのKJ法表札とループリックとの照合

スケール	1.地域で暮らす人々を多面的・総合的に理解する	2.健康ニーズをとらえたサテライト・デイを企画する	3.安全で効果的なサテライト・デイを運営する	4.サテライト・デイの学びと課題が評価できる
レベル1				
レベル2	・文化			・高齢者同士のコミュニケーション※ ・高齢者の学習の場 ・地域の学習の場 ・予防
レベル3	・高齢者の生きがい	・高齢者の生きがい	・学生のコミュニケーション	・地域のコミュニケーション※

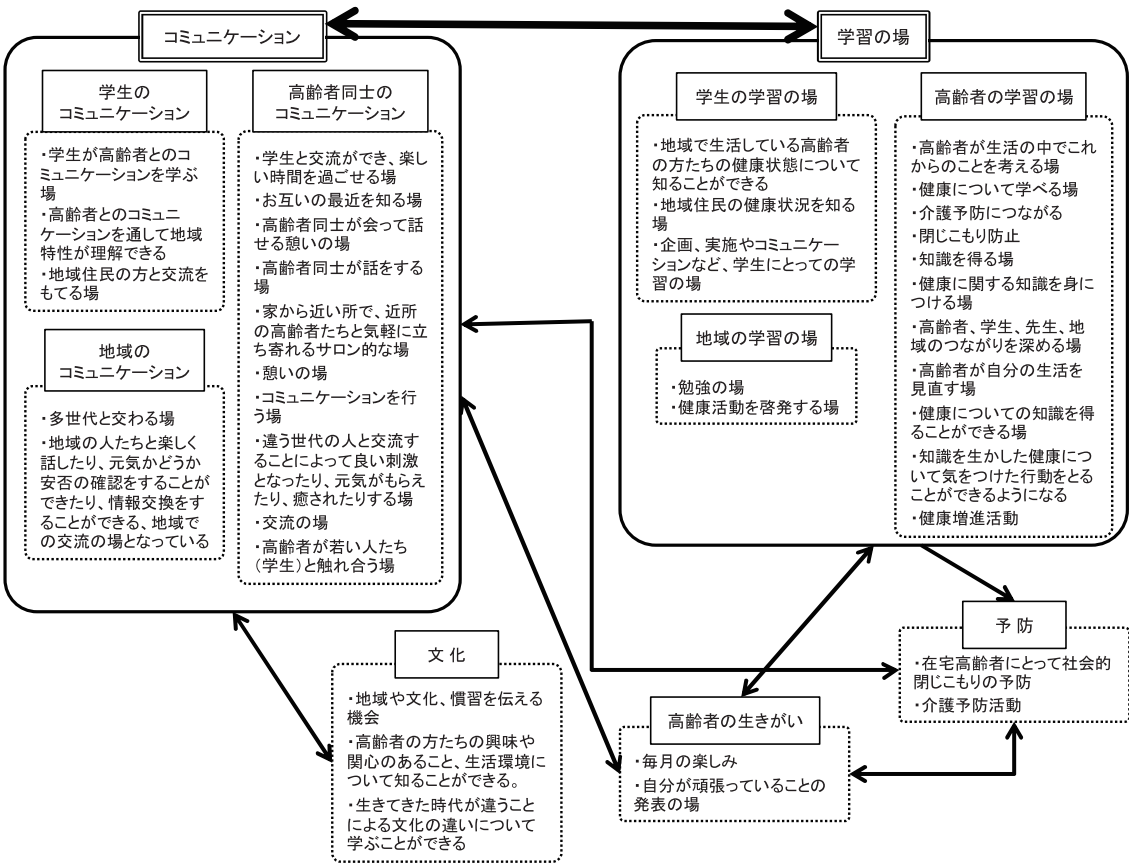


図1 第1クールKJ法図解

2. 第2クール

3年次12月、成人看護学や母性・小児看護学の臨地実習を終えた時期に生活支援看護学実習を経験したグループで、テーマは「脳卒中の予防」であった。第1クールと同様、1週めのサテライト・デイで、対象地域内の小学生を交えた交流もあった。図解を図2に示した。

【高齢者理解】は、“世代間交流を通して人生の先輩からさまざまなことを学ぶ場”など<異世代の交流>，“高齢者の健康について考え、生活を知ることができる”<生活>，“地域の方とコミュニケーションをとり、1人1人の健康状態を知ることができる”<健康>などであった。【地域力の向上】は、“同世代間での交流により、世代ならではの悩みを共有できる”“地域の方々のつながりが広がる”など<同世代の交流>などであった。【QOLの向上】は、“健康意識の向上”<身体面>，“生活の楽しみができ、気分転換になる”など<精神面>であった。【実践の効果】は、“疾病予防への意識を高める”“健康チェックや健康教育を通して自身のことを知ったり、新しい知識を学ぶ”など<意識変容>，“健康への意識が高まり生活習慣を見直せる”<行動変容>などであった。そのほか、“地域に住む人々の健康状態や生活状況を理解し、看護師としての立場からアドバイスや対策などを伝える場”“企画・運

営能力を鍛える”など<学生の実践能力向上>であった。“認められる、感謝されるという体験をする場”のコードは、いずれのグループにも所属しないコードとして扱い、このグループのKJ法図解のタイトルとしていた。

ループリックとの照合では、約半数がスケール1「地域で暮らす人々を多面的・総合的に理解する」としており、サテライト・デイの運営や評価に関連するスケール3, 4では、到達レベルが1や2にとどまっていた(表3)

表3 第2クールのKJ法表札とループリックとの照合

スケール	1.地域で暮らす人々を多面的・総合的に理解する	2.健康ニーズをとらえたサテライト・デイを企画する	3.安全で効果的なサテライト・デイを運営する	4.サテライト・デイの学びと課題が評価できる
レベル1	・健康			・同世代の交流
レベル2	・生活 ・異世代との交流		・学生の実践能力向上	
レベル3	・精神面	・身体面 ・意識変容 ・行動変容		

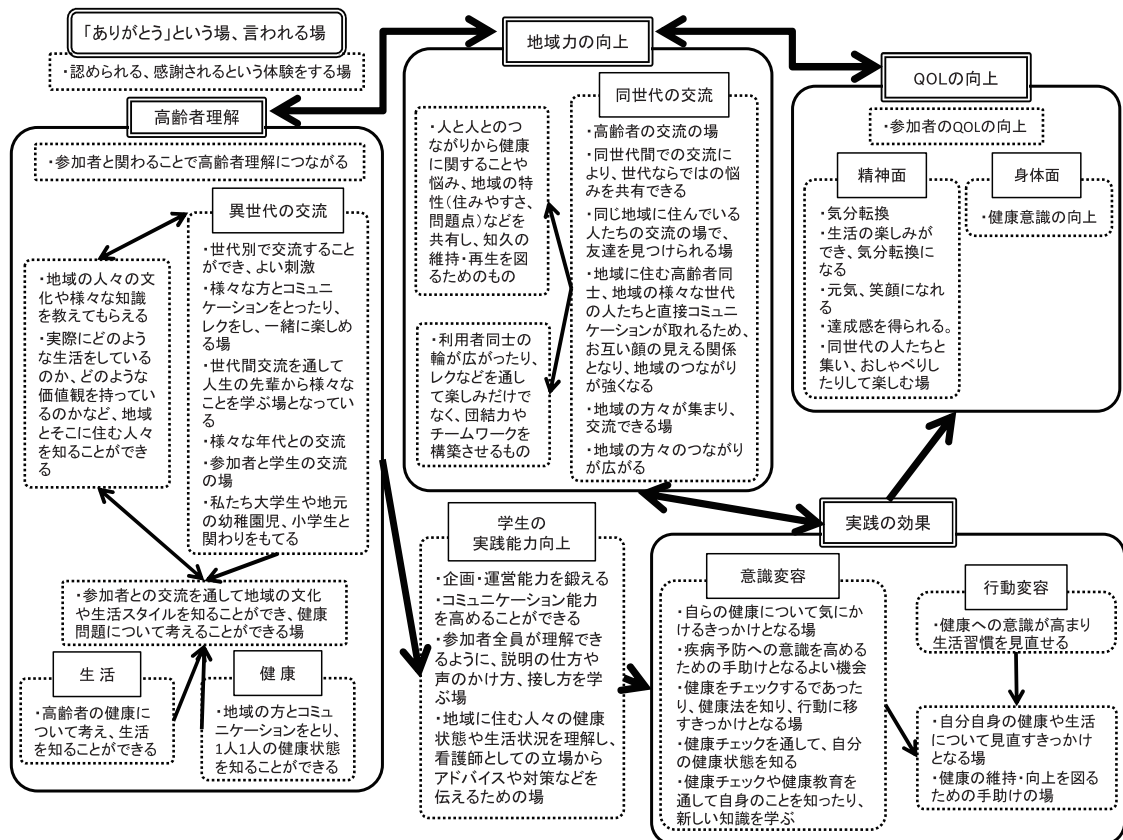


図2 第2クールKJ法図解

3. 第3クール

4年次5月に生活支援看護学実習を経験したグループで、テーマは「サルコペニアの予防」であった。3年次は12月末までの期間に成人看護学、母性・小児看護学を経験した後、約3カ月間、臨地実習の休止期間をはさんだ時期であった。図解を図3に示した。

【学び】は、“大勢を対象とし、視野を広げる”など＜専門性＞，“社会的スキルを学ぶ場”など＜社会性＞，“学生にとって自分たちで考えたことを発表、実施できる場”など＜学習の成果を発表する場＞であった。【交流の場】は，“地域特性を知る場”など＜学生が地域を知る場＞，“地域の方の生活に溶け込む場”など＜学生にとって交流の場＞，“高齢者にとって地域に住む住民や学生など世代の違う人と関わりを持つ場”＜学生と高齢者の交流＞，“顔を合わせ、お互いの様子を確認し合える交流の場”など＜高齢者にとって交流の場＞，“住民同士の結びつきをより強くする”など＜コミュニティの形成＞であった。【健康】は，“健康的な生活に向けての知識を得られる場”など＜知識を得る場＞，“既往がない人にとっては一次予防、既往がある人にとっては三次予防”など＜疾病の予防＞，“参加することによって健康に対する意識が向上し、それが地域へ広がることにより、健康な町づくりへとつながる”など＜地域にとっての健康＞であった。

る”など＜地域にとっての健康＞であった。そのほか，“高齢者にとっては元気や若さをもらえる場”など＜QOLの向上＞，“地域が継承されていく場”であった。

ループリックとの照合では、「地域で暮らす人々を多面的・総合的に理解する」と「サテライト・デイの学びと課題が評価できる」のスケール1とスケール4が多かった。一部、現在のループリック評価指標の内容と一致しにくいいため、学生が討議して照合した表札には※を付した（表4）。

表4 第3クールのKJ法表札とループリックとの照合

スケール	1.地域で暮らす人々を多面的・総合的に理解する	2.健康ニーズをとらえたサテライト・デイを企画する	3.安全で効果的なサテライト・デイを運営する	4.サテライト・デイの学びと課題が評価できる
レベル1	・学生が地域を知る場 ・専門性	・学生と高齢者の交流		・学生にとっての交流の場
レベル2	・専門性		・学習の成果を発表する場	・知識を得る場 ・疾病の予防
レベル3	・高齢者にとって交流の場 ・QOLの向上		・社会性	・地域にとっての健康※ ・コミュニティの形成※ ・地域が継承されていく場※

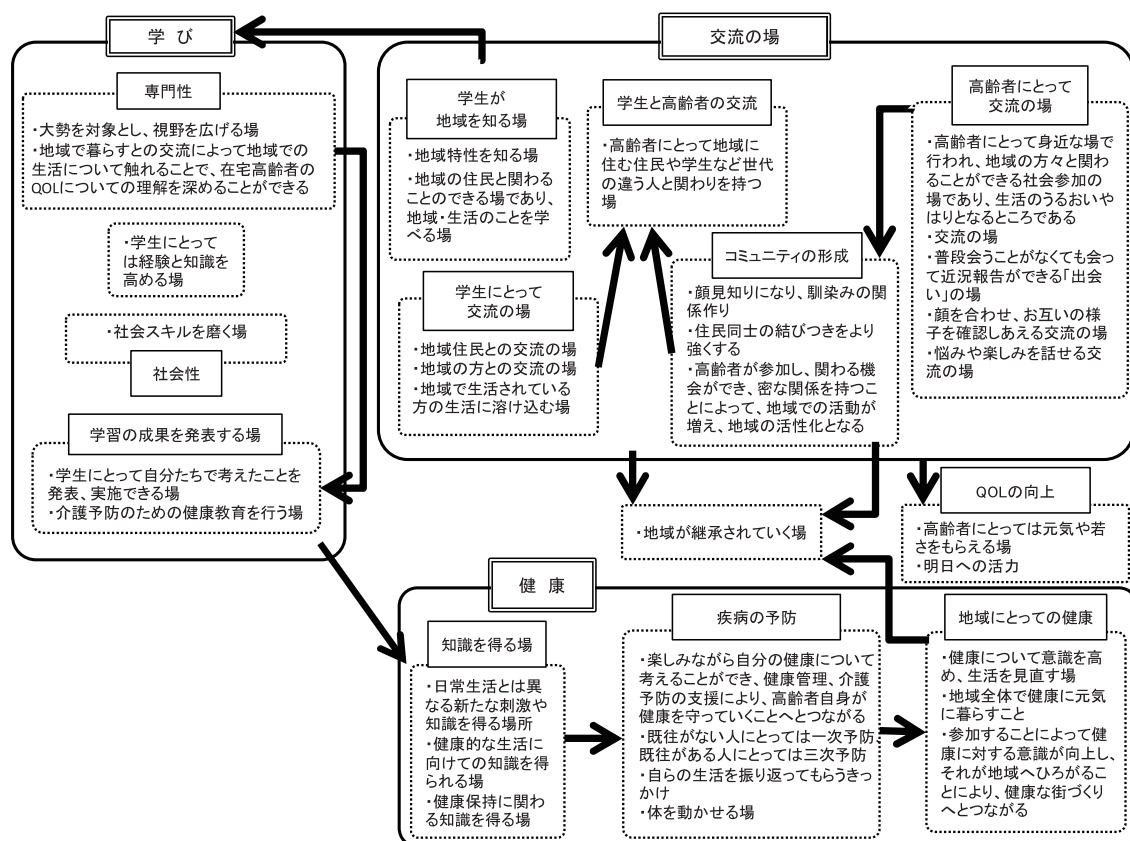


図3 第3クールKJ法図解

4. 第4クール

4年次7月に生活支援看護学実習を経験したグループで、テーマは「認知症の予防」、約1年間の実習期間の最終の実習であった。図解を図4に示した。

【健康状態の把握】は、“地域住民の特徴や悩みを知ることができる”などく参加者の健康状態を把握する>，“自身の健康状態を知ることができる”などく参加者が健康状態を把握する>であった。【健康への動機づけ】は，“健康への意識・関心を高めることができる”などく健康意識の向上>と“レクリエーション、健康教育で健康に関する知識を得ることができる”などく参加者が知識・情報を取得する>であった。【交流】は，“なじみの人々との交流の場”“地域のつながりが強くなる”などく交流の場>，“世代を超えた交流や学習ができる”などく世代交流>および“学生のコミュニケーションスキルアップの場”であった。【QOLの向上】は，“地域住民との会話を楽しむことができる憩いの場”などく憩いの場>と“楽しみ、生きがいづくりの場”などく生きがい>であった。そのほか、“介護予防活動の場”などく予防>と一匹狼のコードとして“生活のメリハリ”“地域の活性化”があった。

ルーブリックとの照合では、スケールの偏りもなく、到達レベルも1～3にわたっていた(表5)。

表5 第4クールのKJ法表札とルーブリックとの照合

スケール	1.地域で暮らす人々を多面的・総合的に理解する	2.健康ニーズをとらえたサテライト・デイを企画する	3.安全で効果的なサテライト・デイを運営する	4.サテライト・デイの学びと課題が評価できる
レベル1	・学生が参加者の健康状態を把握する	・交流の場		
レベル2		・学生が参加者の健康状態を把握する	・参加者が健康状態を把握する ・世代交流	・参加者が健康状態を把握する ・健康意識の向上 ・参加者が知識・情報を取得する ・予防
レベル3	・生きがい ・生活のメリハリ	・憩いの場	・学生のコミュニケーションスキルアップの場	・地域の活性化

IV 考察

1. 学生のとらえた「サテライト・デイ」の意義

1年間、4クールにわたってKJ法を用いたグループワークをおこなった。実習時期の違いはあるが、学生のとらえたサテライト・デイの意義には、『交流』や『コミュニケーション』、『健康』や『疾病の予防』、『生きがい』や『QOL』など、共通するキーワードがあった。サテライト・デイについて4クールの学生が共通して、高齢者

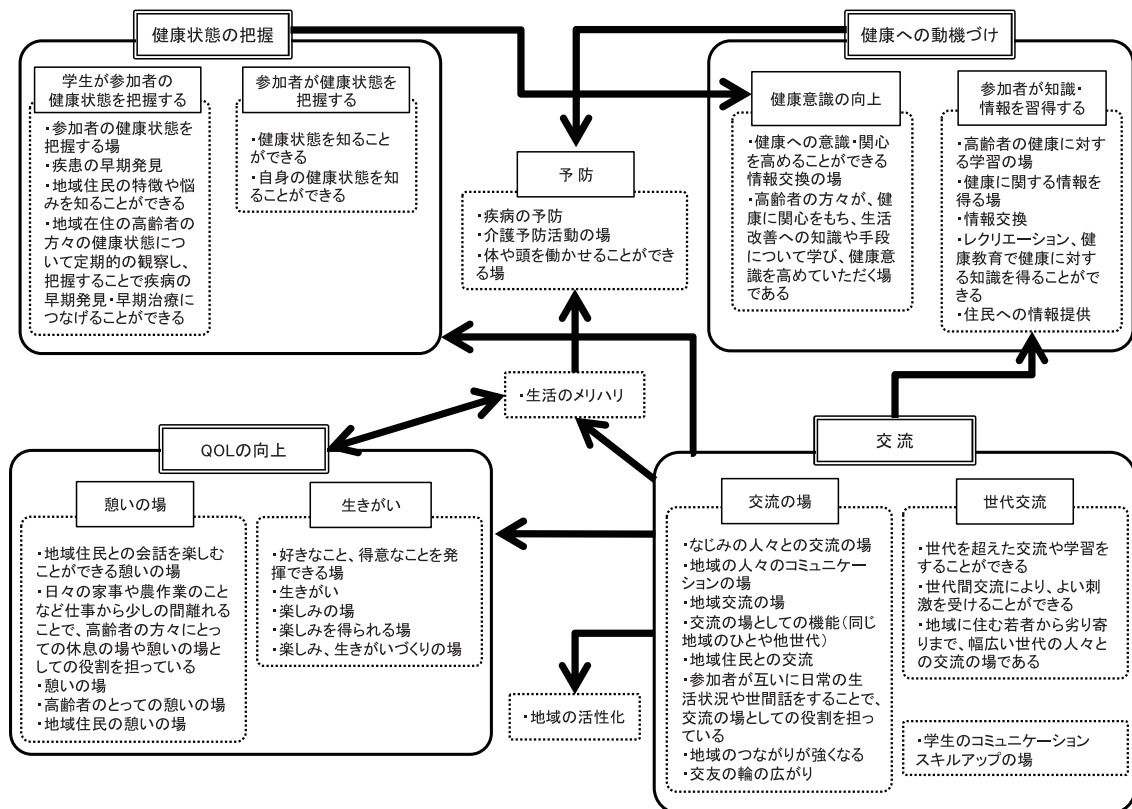


図4 第4クールKJ法図解

同士や高齢者と学生の交流、高齢者の健康増進や高齢者の生きがいづくりに寄与する活動としての意義を感じていた。

4 クールに共通して、「介護予防」の語句を使用した表札はなく、コードにおいても少数であった。学生の表現における「予防」は「疾病の予防」の意味合いが強く、年齢を重ねるなかで生じる生理的な老化による要介護状態の予防の意味合いも含めた「介護予防」に関するサテライト・デイの意義は認識が薄いことがわかった。また、「サービス・ラーニング」の語句を使用したコード、表札はなかった。サテライト・デイを通じてサービスを提供すると同時に、参加者との交流を通してその人生経験や生活の知恵を学べたことが、コードとしては記載されている。学生が体験的学習方法としてのサテライト・デイの意義として意味づけができるよう、ルーブリック評価指標と指導方法の両面で見直しをすることも重要な課題である。

2. KJ 法を用いたグループワークの効果

原田ら⁶⁾は、小児看護学実習のカンファレンスで、日々の気づきや感想を記述したラベルを用いてラベル交流をしながら意見交換をおこない、実習修了時にラベルを集めて図解化と発表をおこなった。実施後の学生は、図解作成はグループでの学びを整理し、共有化の作業であり、学びが深められると評価していた。今回の KJ 法を用いたグループワークにおいても同様の教育効果が期待できる。共有化の作業のうち、グルーピングすることは学生間で共通する学びの確認であり、学びの強化となる。また、自分が考えつかなかった意義を共有する作業でもあり、学生の視野の拡大にもなる。さらに、ルーブリック評価指標との照合により、学習到達の自己評価と課題の明確化につながる。

3. 実習時期による学習到達度の相違

実習時期の違いによる図解の比較では、実習経験の少ない時期は学生の視点に偏りがあったが、実習時期が進むにつれて照合する目標やレベルの偏りが少なくなっていた。

看護学生の臨地実習での学びを実習時期で比較した研究は、母性看護学の分娩期実習での学生の実習時期の違いによる学びの相違を分析した1篇のみであった。伊藤ら⁷⁾は、自由記述式課題の質的帰納的分析では、実習の経験時期の相違によって学生の体験と学びの様相に違いはなかった。ただし、量的分析においては、後半期は前半期に比べて学生の緊張が緩和し、学びの充実につながったと報告している。サテライト・デイでは、毎回のテーマに沿った健康チェックや健康教育などをおこなう。実習時期が進むにつれて学生の専門的な知識や技術、コミュ

ニケーションスキルや社会性が養われることで、先行研究と同様に学生の緊張感が緩和され、学びが豊富になったと考える。

第1クールでは、図解は＜学生のコミュニケーション＞＜高齢者同士のコミュニケーション＞＜地域のコミュニケーション＞とコミュニケーションに関連する表札が多いことが特徴であり、ルーブリック評価指標のスケール4に集中していた。臨地実習のスタート時期では、学生のコミュニケーションに関する不安が強いこともその背景として考えられる。スケール1～3では、レベル3に限局しており、高齢者の生きがいに関連したサテライト・デイの意義は理解できるが、サテライト・デイの企画・運営・評価の実践を通じた理解は容易でないことがうかがえた。

第2クールでは、＜学生の实践能力向上＞や＜意識変容＞＜行動変容＞からなる【実践の効果】など、サテライト・デイの企画・運営やその評価としての高齢者の変化に関する表札が特徴的であった。第2クールの学生は、成人看護学実習で受け持ち患者に対して看護過程に基づいた看護実践を経験しており、学生のレディネスの相違がサテライト・デイの意義の理解の相違となっていることがうかがえた。また、第1クールと第2クールのサテライト・デイの内容として、対象地域の小学生との交流が共通していたが、「異世代交流」に関する内容は第1クールに比べて第2クールが多かった。伊藤ら⁸⁾の報告した緊張感の緩和による学びの充実と考えられる。緊張感の強い臨地実習スタートの時期の学生は、緊張感の高さから視野が広がりにくいことを考慮して、学生の体験の意味づけを支援していくことが必要である。

第3クールでは、＜学生が地域を知る場＞＜地域にとっての健康＞＜コミュニティの形成＞＜地域が継承されていく場＞と、「地域」をキーワードとした表札の多さが特徴的であった。実習の休止期間をはさんだ実習時期であったが、＜学習の成果を発表する場＞など学習者の視点、＜疾病の予防＞＜高齢者にとっての交流の場＞など高齢者への視点、そして地域への視点も加わっており、実習時期が進むにつれて学生の学びがより広い視野で得られていることがうかがえた。一方、ルーブリック評価指標との照合において、＜地域にとっての健康＞＜コミュニティの形成＞＜地域が継承されていく場＞は、現在の内容と一致させにくさがあった。第1クールの＜高齢者同士のコミュニケーション＞＜地域のコミュニケーション＞についても同様であった。現在の生活支援看護学実習のルーブリック評価指標は、サテライト・デイの企画・実践・評価のプロセスを中心とした内容で作成したもので、作成時に短期大学時代の学生の学びとの照合により有用性を確認できていた⁹⁾。しかし、4年制カリキュラムの生活支援看護学実習は、短期大学時代とサテライト・

デイの準備を進める学内演習の方法などが異なるため、今回の結果もふまえて実習目標の見直しの必要性が示唆された。

第4クールでは、実習目標の偏りもなく、到達レベルも1～3にわたっていること、参加者（高齢者）を主語とした表札の多さが特徴的であった。臨地実習の最終段階の時期であり、学生の学習内容とその到達度の水準がより高くなっていることがうかがえた。また、＜生きがい＞＜生活のメリハリ＞を含めて、高齢者に関連した表札が多いことはサテライト・デイの質的な評価への関心の高さを示すものであり、サービス提供者としての自覚であると考ええる。

4. 本研究の限界

本研究は、実習時期による比較を目的としているため、分析に用いた4つの図解は、異なる学生グループによるものである。そのため、個々のグループを構成する学生の違いによる影響が否めないことは本研究の限界である。

謝辞

本研究への協力にご承諾いただいた皆さまに心から感謝申し上げます。

文献

- 1) 栗本一美, 古城幸子, 木下香織他: 在宅高齢者を対象としたサテライト・デイの運営評価, 新見公立短期大学紀要, 26, 177-187, 2005.
- 2) 古城幸子, 栗本一美, 木下香織他, 看護学生が在宅高齢者の生活圏域で実施する「サテライト・デイ」での教育効果, 日本看護福祉学会誌, 1 (1), 14-15, 2006.
- 3) 古城幸子, 木下香織, 栗本一美他: 介護予防プログラム「サテライト・デイ」実習の学習評価 ルーブリック評価指標の活用をめざして, インターナショナル Nursing Care Research, 12(2), 125-131, 2013.
- 4) 栗本一美, 木下香織, 古城幸子他: 生活支援看護学実習における学生の学習到達度-ルーブリック評価指標をもとに-, 新見公立大学紀要, 34, 31-36, 2013.
- 5) 木下香織, 古城幸子: 老年看護学実習における学内演習方法と教育効果(その1) ルーブリック評価表の活用効果と演習方法における課題の明確化, 新見公立大学紀要, 35, 23-26, 2014.
- 6) 原田美枝子: 小児看護学生のカンファレンスにおける図解法を用いたラベル交流に関する一研究, 湘南短期大学紀要, 23, 35-40, 2012.
- 7) 伊藤良子, 中野雅子: 分娩期実習における看護学生の体験と学び, 京都市立看護短期大学紀要, 35, 123-128, 2010.
- 8) 前掲7)と同じ.
- 9) 前掲3)と同じ.